

e-Learning に手を染めるようになったきっかけ（実演 → 資料添付と図の著作権）

(1) 1回の講義で話す内容を黒板に箇条書き（目次）にしている。遅刻した学生や、居眠りから醒めた学生に、講義の流れを把握してほしいからである。1回ごとの講義の狙いと目次、そして講義で触れるキーワード（例：GDP、収穫逓減、マルサスの罠、公共財）を WebClass に掲載することにより、メリットが2つ期待できる。1つは、学生が前もってその日の講義のあらましを知ることができる。コピーしてノートに貼りつけておくこともできる。もう1つは、欠席しても、前後の講義の流れをある程度は把握できる。ただし、予習に活用している学生はほとんどいないようだ。試験の直前になって、WebClass を閲覧し、キーワードを調べるのがせいぜい。目次だけを答案に書き写す学生もいる。なお、携帯電話で WebClass を閲覧する学生も多いだろうと考えて、情報量を多くせず、テキスト形式で作成している。ただし、携帯電話では添付資料を見たりダウンロードして印刷したりすることができないから、結局は学生は PC を使わざるを得ない。

(2) 履修生が数百名と多かったころ、講義中に使う資料（統計や図）を前もって自分で人数分印刷し、自分で教室まで運び、配っていた。この労力を省きたかった。だが、現実には、WebClass から資料をダウンロードして印刷し、講義に持参する学生は、全体の20~30%にすぎない。手許に資料がないまま講義を聴いている学生には、ちんぷんかんぷんだらう。それでも、資料を持参しなかったために講義に身が入らないのは、その学生の自己責任だと割り切っている。少人数の科目では、小生の方が根負けして、印刷した資料を自分で配っている。

(3) リポートの課題を従来は事務室前の掲示板に貼ってもらっていた。WebClass 上にリポート課題を発表し、しかも参考資料を添付することができるのは、「授業中にリポートのことなど聞かなかった」と学生に言い訳させないために有効。

(4) 以前は出席カードを配り、回収したカードを学籍番号順に並べて履修者名簿に出欠を記入していた。出席管理を WebClass でおこなえるようになってから、手間が省けた。ただし、別項で述べるように、携帯電話での出席登録と WebClass での出席管理には課題も多い。

WebClass で活用していない機能とその理由

(a) ゼミナールと大学院の少人数クラスでは WebClass そのものを使っていない。かつては使っていたが、掲載した内容が変わり映えせず、直接学生とメールのやりとりをするので間に合うため。ディスカッションなどに活用できるかもしれないが、自分の意見をはっきり述べるのを嫌ういまどきの学生に有効とは思えない。多人数講義では、講義を聴いて不明な個所を教師にメールで問い合わせることができるはずだが、質問メールや意見・感想メールを受け取った経験はない。ただし、成績評価に対する不満はたまに送られてくる。

(b) リポート機能と小テスト機能は使う気になれない。小生の担当科目は〇×式や解答選択で答えられる性格のものでなく、考える道筋をある程度長い文章で説明してもらいたいと考える

から。教室で紙の媒体の形で提出されたレポートは、履修生の多寡にかかわらず、添削したあと返却している。

(c) 前回6月の研究会で紹介されたポートフォリオ機能は、ゼミ担当者以外の、しかも非常勤講師にとって、どんなメリットがあるのかわからないので、使っていない。

WebClass で改善を求めたい点

(1) シラバスと科目登録と成績報告とを、全学一括のシステムに統合すると便利になるはず。

(2) 通年科目では30回分の講義の一覧が画面に映るが、第15回目や第20回目の講義を閲覧したいときでも、つねに第1回目から映し出されてしまい、画面をスクロールしなければならない。学生の立場からすれば、後期の講義を閲覧したいのに、つねに前期の講義が先頭に出てくるとするのは、わずらわしい。小生は、赤嶺さんに頼んで、前期分と後期分とに分割してもらっている。

出席管理の問題点

(i) 今後、利用者が増え続けること間違いなしのスマートフォンやタブレット型通信機器への対応は、どうなるのか？ 今は、教室で携帯電話を通じて出席を登録できない学生（携帯電話を持たない学生を含む）のために、出席カードを手渡して、それを回収した小生が学籍番号順に並べたのちに WebClass に登録しているが、後述するように出席管理の画面が使いにくくて、手間がかかる。とくに履修者の少ない科目（二十名強）では、携帯電話を使って学生自身に出席を登録させるのを断念して、出席簿を読み上げている。

(ii) 履修登録と WebClass とが直結していないので、出席名簿をすぐに利用することができない。しかも教員自身が個々に WebClass の使用を事前に情報科学センターに申請しなければならない。WebClass を本格的に利用できるのは学期の3分の1が経過してからというのは、利用価値を低める。

(iii) 画面を通じて出席管理の必要事項（登録可能な期間、パスワードの設定など）を入力する手順がわかりにくい。

(iv) 出席情報を右側のウィンドウで修正したあと、左側の一覧表が最初の履修生の行から再開してしまう。履修生が多くて画面に一度に映らない場合、左側の画面をそのたびにスクロールさせなければならない、使い勝手が悪い。

(v) 「出席点」という誤解を生みやすい点数が記録され、学生は成績評価にこの点数が反映されるものと思い込んでしまう。しかも、その「出席点」は、「未解答」〔なぜ「未回答」でないのか？〕および「0」から「10」までの11段階になっている。点数の理由区分は「出席」「欠席」「遅刻」「早退」「病欠」「公欠」「交通機関の遅れ」「アリバイ証明不可能」「システムトラブル」「その他」が根拠となっているが、それぞれの点数との連携の仕組みがさっぱり理解できない。点数を「10」に、理由を「欠席」と修正しても、出欠の記録には「10」すなわち「出席」として反映されてしまう。